漢詩講演会　　　―　李白「白髪三千丈」　ー　　　　　　　市川桃子

二〇一九年五月二九日　　神奈川近代文学館

　秋浦歌十七首　其十五　　　　　　　　　　　　　（李太白集注巻八）

白髮三千丈

緣愁似箇長　　いにりてくのくし

不知明鏡裏　　らず　の

何處得秋霜　　れのか　をたる

【訳】

白髮がなんと三千丈

愁いのためにこのように長くなった。

明るい鏡の中の自分を見ても

いったいどこから秋の霜がこんなに頭に降ってきたのか分からない。

【コメント】

有名な「白髪三千丈」。李白はこの句で、何を言いたかったのか。

唐代だと、一丈は約三メートル。三千丈ならば九キロメートル。李白は、なぜ、このような誇張表現をしたのか。「秋浦歌（秋浦吟）」　の他の作品を読みながら、李白の気持ちを想像してみたい。

この作品が書かれた時は、天宝十三載（754）、李白五十四歳のころと言われている。秋浦県は、長江の近くの池州（今の安徽省池州）にあり、秋浦水という川が流れている。

秋浦歌十七首　　　其一

秋浦長似秋　 えににたり　 　　　　(qiū pǔ cháng sì qiū)

蕭條使人愁　 　としてをしてえしむ　　(xiāo tiáo shǐ rén chóu)

客愁不可度　　 　　るからず　　　　　　　(kè chóu bù kě dù)

行上東大樓　 　きてる　の　　　　　　(xíng shàng dōng dà lóu)

正西望長安　　 　ににをむ　　　　　　(zhèng xī wàng cháng ān)

下見江水流　　　　にる　のれ　　　　　　(xià jiàn jiāng shuǐ liú)

寄言向江水　　　 をせてにかう　　　　(jì yán xiàng jiāng shuǐ)

汝意憶儂不　　　 の　をうやや　　　　(rǔ yì yì nóng bù)

遥傳一掬淚　　　　かにう　の　　　　　(yáo chuán yī jū lèi)

爲我達揚州　　　　がににせん　　　　　(wéi wǒ dá yáng zhōu)

【訳】

秋浦の地は、その名のように、いつも秋のようだ。

寂しい光景が人を悲しませる。

旅の愁いは　はかりしれないほどで、

そこで東の大楼山に登ってみた。

真西にある長安の方角を眺め、

下を見れば河の水が流れていく。

河の水に話しかけてみる、

「お前は私を気遣ってくれるかい？

遥か遠くに、ひとすくいの涙を送るから

私のために、揚州まで届けてくれないか。」

秋浦の歌　其十二

水如一疋練　はののし　　(shuǐ rú yī pǐ liàn)

此地卽平天　の　ち 　　　　(cǐ dì jí píng tiān)

耐可乗明月　ろにじて　　　　 (néng kě chéng míng yuè)

看花上酒船　をてにるし (kàn huā shàng jiǔ chuán)

【訳】

湖面にたたえられた水は、一枚のねり絹のようだ。

こここそ、世に聞く平天湖。

今夜の美しい月の光を幸いとして、

花を見に酒を携えて舟に乗ろうではないか。

秋浦の歌　其十一

邏人横鳥道 　　にたわり (luó rén héng niǎo dào)

江祖出魚梁 　　にづ　　　　 (jiāng zǔ chū yú liáng)

水急客舟疾 　にして　し　(shuǐ jí kè zhōu jí)

山花拂面香 　　をいてる　　(shān huā fú miàn xiāng)

【訳】

邏人石は鳥の通う高所に横たわり

江祖山は魚梁（やな）に突き出ている

水の流れは急で　旅の船足は速い

山の花が顔に触れて香る

秋浦の歌　　其九

江祖一片石　　 の (jiāng zǔ yí piàn shí)

靑天掃畫屏　 をう (qīng tiān sǎo huà píng)

題詩留萬古　 をしてにめんとすれば (tí shī liú wàn gǔ)

綠字錦苔生　　　にぜん (lù zì jǐn tái shēng)

【訳】

水際に高くそびえる江祖岩は

真っ青な大空に美しい屏風を立てたようだ。

この大岩に詩を書いてはるか後世にとどめようとすれば、

きっと字は緑になり錦の苔が生ずることだろう。

秋浦の歌　　其八

秋浦千重嶺　のの　　　　　　　　(qiū pǔ qiān zhòng lǐng)

水車嶺最奇　　もなり　　　　　　(shuǐ chē lǐng zuì qí)

天傾欲墮石　 ちんとするをけ　　 (tiān qīng yù duò shí)

水拂寄生枝　はのをう　　　　　　(shuǐ fú jì shēng zhī)

【訳】

秋浦の両岸に千とたたなわる峰々のなかで

水車嶺は最もすばらしい。

落ちそうになっている岩の上に空がのしかかり

嶺の木々に寄生する植物の枝を河の水がかすめて流れる

秋浦の歌　　其三

秋浦錦駞鳥　　 の　 (qiū pǔ jǐn tuó niǎo)

人間天上稀　　 になり (rén jiān tiān shàng xī)

山雞羞淥水　　 　にじ　 (shān jī xiū lù shuǐ)

不敢照毛衣　　 てをらさず (bù gǎn zhào máo yī)

【訳】

秋浦の錦の色彩をした駞鳥は

人間世界にも天上世界にも稀な鳥だ。この鳥を見れば、

美しい羽毛を誇る山雞も、澄んだ川の水に映る自分の姿を恥じて

あえてその羽衣を水に照らそうとしない。

秋浦の歌　　其五

秋浦多白猿　にく　　　　　　　(qiū pǔ duō bái yuán)

超騰若飛雪　することのし　(chāo tēng ruò fēi xuě)

牽引條上兒　す　の 　　　　　(qiān yǐn tiáo shàng ér)

飲弄水中月　みてぶ　の　　(yǐn nòng shuǐ zhōng yuè)

【訳】

秋浦には白い猿が多く

飛びはねる様子は、舞い上がる吹雪のようだ。

枝の上の子猿をひっぱってきて

水を飲みながら、水中の月影で遊んでいる。

秋浦歌　其十三

淥水淨素月　　 く 　　　　　　　　(lù shuǐ jìng sù yuè)

月明白鷺飛　　らかにして　ぶ 　(yuè míng bái lù fēi)

郎聽採菱女　　はく　の 　　　　(láng tīng cǎi líng nǚ)

一道夜歌歸　　　　いてるを　　　　(yí dào yè gē guī)

　【訳】

澄んだ水に白い月かげが清らかに映り

明るい月光のなかを白鷺が飛んでいく。

若者が聞きほれている。菱を摘む娘たちが

夜道を連れだって帰っていく歌声を。

秋浦の歌　其十四

爐火照天地　 をらし　　(lú huǒ zhào tiān dì)

紅星亂紫烟　 　る　　　　 (hóng xīng luàn zǐ yān)

赧郎明月夜\*　　の\*　　　 (nǎn láng míng yuè yè)

歌曲動寒川　 　をかす　(gē qǔ dòng hán chuān)

【訳】

溶鉱炉の火は天と地を照らし

赤い火の粉が星のようにまき散らされて紫の炎と乱舞する。

赤く顔をほてらせた若者が、明るい月の夜に、

うたう歌の調べはつめたい川をどよもして響き渡る。＊赧はもと（赤+皮）字

秋浦の歌　其十六

秋浦田舎翁 　の 　(qiū pǔ tián shè wēng)

採魚水中宿 をりてにす (cǎi yú shuǐ zhōng xiǔ)

妻子張白鷴 　をせんと (qī zǐ zhāng bái xián)

結罝映深竹 をんで　にず (jì jū yìng shēn zhú)

【訳】

秋浦のいなかのおじいさんは

魚を採ろうと川の中で舟に泊まっている。

その妻や子が白鷴を生け捕ろうと

結んだあみが深い竹藪の緑に映えている。

秋浦の歌　其十七

桃波一歩地　　の　　　 (táo bō yī bù dì)

了了語聲聞　　こゆ　 　(liǎo liǎo yǔ shēng wén)

闇與山僧別　にとれ　　 　(ān yú shān sēng bié)

低頭禮白雲　をれてにす　(dī tóu lǐ bái yún)

【訳】

桃波はほんの一歩というように　すぐ近いところなので

ろうろうと語る声がはっきりと聞こえてくる。

黙って山の僧と別れ

頭を低れて僧のいる白雲のかなたに挨拶をした。

秋浦歌（秋浦吟）　　其十五

白髮三千丈　　縁愁似箇長　不知明鏡裏　　何處得秋霜

【不知明鏡裏】

の解釈　　①　手鏡　　②　水鏡（川や池の水に映す）

【参考】　同じころ、近くの川で作られた作品

「淸溪行」　　　李白

淸溪淸我心　　　がをくす

水色異諸水　　　になる

借問新安江　　す

見底何如此　　をればぞのし

人行明鏡中　　はく　の

鳥度屏風裏　　はるの

向晚猩猩啼　　晩に向かいて猩猩啼き

空悲遠遊子　　空しく遠遊子悲しましむ

【訳】清溪の清らかな水は私の心も清くする。水の色はほかのどの川の水とも異なる。清らかさで名高い新安江でも、底をのぞき込めば、このようではないだろう。人は明るい鏡の中を歩いていく。鳥はそびえる屏風（山々）の間を飛んで行く。暮れに猩猩が啼いて、遠く旅に出た者は悲しくなってくる。

【結論】

「不知明鏡裏」の明鏡は、水鏡である。李白は澄んだ水に我が身を見た。

【緣愁似箇長】　　この愁いとは？

旅愁

秋浦歌　　其二

秋浦猿夜愁　 にう (qiū pǔ yuán yè chóu)

黄山堪白頭 　にえたり (huáng shān kān bái tóu)

青溪非隴水 　にざれども (qīng xī fēi lǒng shuǐ)

翻作斷腸流 ってのれとる (fān zuò duàn cháng liú)

欲去不得去　　らんとして るをず (yù qù bù dé qù)

薄遊成久遊 　とる (báo yóu chéng jiǔ yóu)

何年是歸日　　れのかれる (hé nián shì guī rì)

雨淚下孤舟　　りて　にる (yǔ lèi xià　gū　zhōu)

【訳】

秋浦では夜になると猿が悲しい声をあげ、

黄山を見上げれば、人は白髪になりそうだ。

青溪は 悲しみの音を立てるという隴水ではないけれど

やはり断腸の音を立てて流れていく。

去ろうとするのに、いつまでもここから去ることができず

少しの間の旅だと思っていたが、ずいぶん長く旅を続けることになった。

いつになったら帰る日が来るのだろうか。

涙が降りそそぎ、一人ゆく小舟に落ちる。

秋浦歌　其六

愁作秋浦客　いてのとり　(chóu zuò qiū pǔ kè)

强看秋浦花　いてる　の 　(qiáng kàn qiū pǔ huā)

山川如剡縣　　のし　　　　　(shān chuān rú yǎn xiàn)

風日似長沙　　にたり　　　(fēng rì sì cháng shā)

【訳】　旅愁に耐えながら秋浦を旅していて

やるせない思いで秋浦の花を見る。

見れば山も川も名勝の剡縣のように美しく

風光は景勝地の長沙に似ている。

突然の老いの自覚

秋浦歌　其四

兩鬢入秋浦　　　にり　　　　 (liǎng bìn rù qiū pǔ)

一朝颯已衰　　 としてにう (yì zhāo sà yǐ shuāi)

猿聲催白髮　　 をし　　　　　(yuán shēng cuī bái fà)

長短盡成絲　　 くとる　　 (cháng duǎn jìn chéng sī)

【訳】　秋浦に入ってからのこと、鬢の毛（顔の両横の髪）は

ある朝 いっぺんに乱れて細くなった。

猿の悲しい鳴き声が いっそう髪を白くし

長いのも短いのも すべて絹糸のようになってしまった。

功績も無く、地位も無く

秋浦歌　其七

醉上山公馬　いてのにり　　　　　　　　(zuì shàng shān gōng mǎ)

寒歌甯戚牛　くしてのをう　　　　　　　(hán gē níng qī niú)

空吟白石爛　しく　のたるをずれば　(kōng yín bái shí làn)

淚滿黑貂裘　のにつ　　　　　　　 　(lèi mǎn hēi diāo qiú)

　【訳】

酔っぱらって山公のように頭巾をさかさにかぶって馬に上り

寒いときには甯戚のように牛の角をたたいて歌う

しかし「白い石が光っている」と甯戚のように歌っても、どうにもならず

黒貂の上着は涙でいっぱいになる。

美しい風景にひそむ孤独

秋浦の歌　其十

千千石楠樹 の　 (qiān qiān shí nán shù)

萬萬女貞林 　の　 (wàn wàn nǚ zhēn lín)

山山白鷺滿 　ち (shān shān bái lù mǎn)

澗澗白猿吟 　ず (jiàn jiàn bái yuán yín)

君莫向秋浦 　にかうれ (jūn mò xiàng qiū pǔ)

猿聲碎客心 　く (yuán shēng suì kè xīn)

【訳】　　幾千もの石楠（シャクヤク）の樹

幾万もの女貞（トウネズミモチ）の林

どの山にも白鷺が群をなしており

どの谷川でも白猿がうたう。

君　秋浦に行ってはいけない。

行けば猿の声が旅人の心を砕くだろう。

【白髮三千丈】

底まで澄んだ美しい秋浦の水。長い船旅の途中に、うつむいて水を眺めていた李白は、そこに、思いがけない白髪を見た。

いつ、自分からこれほどに時が失われたのだろう。いぶかしい。

川の流れていく方向を眺めると、白髪もその川の流れと共に流れていくようになびいている。

李白の愁いは、白髪とともに流れていく。川の流れは、三千丈。その九キロほども、愁いは大きいのであった。

【縁愁似箇長】

ところで、「かくのごとし」とは「如此」と書くのではなかったか。

「似箇」は、口語で、「こんなになっちゃった」という感じ。

「白髪三千丈」　　それでも、李白はあくまで明るい。

「愁いのために、こんなに長くなっちゃった」